

2024 年度表彰報告

表彰委員会

2024 年度の環境科学会学会賞、学術賞、奨励賞、論文賞は、次の方々に贈呈することが、理事会の議を経て決定致しました。各賞受賞者は、2024 年 9 月 9 日（月）～10 日（火）に東京大学で開催される環境科学会 2024 年会でご講演いただき、表彰式で表彰します。

学会賞（1 名）

渡辺知保（長崎大学・教授）

表彰課題：プラネタリーヘルスおよび人間の健康と環境の関係からの環境科学への貢献

学術賞（2 名）

小林憲弘（国立医薬品食品衛生研究所・室長）

表彰課題：水道水質評価における質量分析技術の研究およびその学術的普及

村上一真（滋賀県立大学・教授）

表彰課題：環境配慮行動の促進方策と意思決定プロセスに関する研究

奨励賞（1 名）

青木えり（総合地球環境学研究所・上級研究員）

表彰課題：人々の環境配慮行動とその心理構造の解析に関する研究

論文賞（2 編）

徳村雅弘*、王斉*、石橋龍太郎**、安保貴永**、皆川正和**、三宅祐一*、雨谷敬史*、牧野正和*
（* 静岡県立大学 ** 三菱ケミカル株式会社）

対象論文：炭素材料併用型フォトフェントン反応による汚染物質除去機構の反応速度論的解析
環境科学会誌, 35 巻 2 号, p. 103-112 (2022)

北本靖子*、伊藤理彩*、東海明宏*
（* 大阪大学）

対象論文：水道水源における化学物質流出事故に対する高度浄水処理及び対策オプションの評価
環境科学会誌, 35 巻 3 号, p. 121-136, (2022)

【選考経過等】

環境科学会では、学会規程により、環境科学の研究において顕著な業績をあげた研究者に学会賞、学術賞、奨励賞を、また、環境科学会誌に優秀な論文を発表した著者に論文賞を贈呈することが定められています。上記の 2024 年度各賞受賞者の選考経過は以下のとおりです。

表彰規程に従い、環境科学会 Web サイトに 2023 年 12 月 24 日を締め切りとして、各賞受賞候補者の推薦依頼を会告として告示しました。その結果を受けて、2024 年 1 月 22 日に表彰委員会を開催して各賞受賞候補者を選考し、その選考経過を 2 月 7 日に開催された理事会に報告し、理事会の議を経て各賞受賞者が正式に決定されました。

例年、学会賞受賞者には表彰式後に記念講演を、学術賞受賞者には年会において受賞記念シンポジウムを企画していただき、その中で受賞記念講演を行っていただくよう依頼することとしています。また、奨励賞および論文賞の受賞者についても、年会の関連する一般研究発表あるいはシンポジウムの中でそれぞれ受賞記念講演を行っていただくよう依頼することとしており、現在、年会委員会と協議の上、準備中です。会員の皆様の年会への多数ご参加をお待ちしています。

最後に、2025 年度表彰については、受賞候補者の推薦を 2024 年 11～12 月を締切として会員の皆様からお願いする予定であることを記して、表彰委員会報告と致します。

[2024 年度表彰委員会]

委員長	藤田 壯	東京大学
理事	高梨啓和	鹿児島大学
	田崎智宏	国立環境研究所
幹事	村上道夫	大阪大学
	沼田大輔	福島大学
委員	加藤博和	名古屋大学
	杉本賢二	大阪公立大学
	田原麻衣子	国立医薬品食品衛生研究所
	徳村雅弘	静岡県立大学
	錦澤滋雄	東京工業大学
	肱岡靖明	国立環境研究所
	棟居洋介	東京工業大学

[2024年度の各賞受賞者]

「学会賞」

受賞者氏名：渡辺 知保（わたなべ ちほ）

表彰課題：プラネタリーヘルスおよび人間の健康と環境の関係から
の環境科学への貢献

所属・職：長崎大学・教授

専門分野：人類生態学, 環境保健学, 毒性学, 持続可能性と健康

略歴：

- 1982年3月 東京大学 医学部保健学科 卒業
 - 1984年3月 東京大学 大学院医学系研究科修士課程 修了
 - 1989年8月 東京大学 大学院医学系研究科博士課程 単位取得済退学
 - 1989年8月 東北大学 医学部衛生学講座 助手
 - 1997年12月 東京大学 大学院医学系研究科 国際保健学専攻 人類生態学分野 助教授
 - 2005年4月 東京大学 大学院医学系研究科 国際保健学専攻 人類生態学分野 教授
 - 2006年4月 東京大学 Alliance for Global Sustainability 推進室 教授（兼任）
 - 2010年8月 東京大学 地球観測データ統融合連携研究機構 教授（兼任）
 - 2015年4月 東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク 機構長（兼任）
 - 2017年4月 国立研究開発法人 国立環境研究所 理事長
 - 2021年4月 長崎大学 大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科 教授（現在に至る）
- 本学会では、副会長（2019~2020）、会長（2021~2022）、顧問（2023~）を歴任。



渡辺 知保
（わたなべ ちほ）

表彰理由：

渡辺知保氏は、人間の健康と環境の関係について多方面かつ国内外で長年研究を行ってきた。毒性学や環境保健学などの専門性に基づいて、子供や将来世代などの脆弱とされる集団を含めた幅広い対象集団への様々な影響を明らかにしてきた。例えば、内分泌攪乱物質が視床下部ニューロンのシナプス形成に与える影響、無機砒素曝露の次世代への影響、注意欠陥多動性障害(AD/HD)の感受性要因、ストレスと栄養が脳機能に及ぼす影響、西ジャワ農村部における水系の化学物質汚染と学童の健康との関係、アジア途上国における環境汚染と小児への曝露影響評価などである。そして、それらに関する論文を国内外で多数発表されている。

近年は、それらの知見をプラネタリーヘルスの研究分野へと展開し、人間・社会の健康と地球の健康は相互に関係するとの考えのもと、より幅広く、システム的に地球環境およびローカルの環境を持続的に変えていく学際的な研究を推進するなど、環境科学研究の発展に大きく貢献されてきた。また、環境科学会の運営においても、副会長を2年、会長を2年務められるなど重要な役割を果たし、環境科学会の発展を支えてこられた。

渡辺知保氏のこのような業績は、環境科学ならびに環境科学会の発展に貢献した者に与えられる環境科学会学会賞にふさわしいものと評価できる。

主要業績

【論文】

1. Falk J, Attig-Bahar F., Colwell R.R., Behera S.K., El-Beltagy A.S., von Braun J., Dasgupta P., Gleick P.H., Kaneko R., Kennel C.F., Koundouri, P., Lee Y.T., Lovejoy T.E., Luers A., Murray C.A., Lal R., Serageldin I., Sokona Y., Takeuchi K., Taniguchi M., Watanabe C., Yasunari T., Addressing our planetary crisis- Consensus statement from the presenters and International Advisory Committee of the Regional Action on Climate Change (RACC) Symposium held in conjunction with the Kyoto-based Science and Technology in Society (STS) Forum, 1 October 2021 Sustainability Science 17, 5-7 (2022)

2. Asayama S., Emori S., Sugiyama M., Kasuga F., Watanabe C., Are we ignoring a black elephant in the Anthropocene? Climate change and global pandemic as the crisis in health and equality. Sustainability Science 16, 695-701 (2021)
3. Wai K.M., Umezaki M., Umemura M., Ohn Mar, Watanabe C., Protective role of selenium against telomere shortening in newborns induced by in Utero heavy metal exposure. Environmental Research 183, 109202 (2020)
4. Falk J., Colwell R., El-Beltagy A., Gleick P., Kennel C., Lee Y.T., Luers A., Murray C., Serageldin I., Takeuchi K., Watanabe C., Yasunari T., Beyond 2020: converging crises demand integrated responses. Sustainability Science 16, 691-693 (2021)
5. Ebi K.L., Harris F., Sioen G.B., Wannous C., Anyamba A., Bi P., Boeckmann M., Bowen K., Cisse G., Dasgupta P., Dida G.O., Gasparatos A., Gatzweiler F., Javadi F., Kanbara S., Kone B., Maycock B., Morse A., Murakami T., Mustapha A., Pongsiri M., Suzan G., Watanabe C., Capon A., Transdisciplinary research priorities for human and planetary health in the context of the 2030 agenda for sustainable development, International Journal of Environmental Research and Public Health 17, 8890 (2020)
6. 渡辺知保, 微量元素と成長・発達, 日本健康学会誌, 83(6), 184-190 (2017)

など多数

【書籍】

- ・ 渡辺知保, 梅崎 昌裕, 中澤 港, 大塚 柳太郎, 関山 牧子, 吉永 淳, 門司 和彦: 人間の生態学, 朝倉書店 (2011)

ほか多数

学術賞

受賞者氏名：小林 憲弘（こばやし のりひろ）

表彰課題：水道水質評価における質量分析技術の研究およびその学術的普及

所属・職：国立医薬品食品衛生研究所・室長

専門分野：分析化学

略歴：

2000年 上智大学理工学部化学科 卒業

2002年 横浜国立大学工学研究科物質工学専攻博士課程前期修了

2004年 横浜国立大学大学院環境情報学府環境マネジメント専攻博士課程後期 修了

2004年 産業技術総合研究所化学物質リスク管理研究センター 研究員

2008年 産業技術総合研究所安全科学研究部門研究員

2011年 国立医薬品食品衛生研究所生活衛生化学部第三室研究員

2012年 国立医薬品食品衛生研究所生活衛生化学部第三室主任研究官

2013年 国立医薬品食品衛生研究所生活衛生化学部第三室室長（現在に至る）



小林 憲弘
（こばやし のりひろ）

表彰理由：

小林憲弘氏は、水道水質評価における質量分析技術の利活用に関し、環境科学会誌等において多くの成果を公表しており、質量分析技術の研究およびその学術的普及に大いに貢献した。その成果は、環境科学会における論文賞、奨励賞、優秀研究企画賞などで高く評価されており、一連の研究としての学術的価値が認められる。とくに、分析結果の精度や確度の管理に関する実学的・体系的な成果は有用性が高く、他に例を見ない優れた成果である。また、グルホシネートやグリホサートなどの水道工学において重要かつ時節を得た物質を対象とした点や、日常的な水道水質評価業務に適用すべく、簡易定量技術と呼べる技術の精度や確度の管理に注力するなど、実学に特化して研究を展開している点も評価に値する。以上のように、小林憲弘氏の研究業績と活動は、環境科学分野において特に優れた研究業績を挙げた者に与えられる環境科学会学術賞にふさわしいと評価できる。

主要業績：

【論文】

1. 木下輝昭, 小田智子, 栗田翔, 山崎貴子, 猪又明子, 佐久井徳広, 野原健太, 中村李, 土屋裕子, 小林憲弘, 水道水中農薬の GC/MS スクリーニング分析データベースの構築と定性・定量精度の検証. 環境科学会誌, 37(2), 53-63 (2024)
2. 小林憲弘, 土屋裕子, 五十嵐良明, GC/MS ターゲットスクリーニング分析法による水道水中農薬の定量精度の評価, 環境科学会誌, 35(2), 34-48 (2022)
3. 小林憲弘, 土屋裕子, 高木総吉, 五十嵐良明, 水道水中農薬の GC/MS スクリーニング分析法の開発と実試料への適用, 環境科学会誌, 33(5), 136-157 (2020)
4. 小林憲弘, 木下輝昭, 鈴木俊也, 高木総吉, 吉田仁, 望月映希, 小林浩, 辻清美, 上村仁, 植田紘行, 齋藤信裕, 岩間紀知, 粕谷智浩, 古川浩司, 塚本多矩, 市川千種, 久保田領志, 五十嵐良明, 水道水中のグルホシネート・グリホサート・AMPAの LC/MS/MS 一斉分析法の妥当性評価, 環境科学会誌, 29(3), 137-148 (2016)
5. 小林憲弘, 久保田領志, 齋藤信裕, 木村謙治, 宮崎悦子, 平林達也, 水田裕進, 木村慎一, 宮本紫織, 大倉敏裕, 中村弘揮, 粕谷智浩, 古川浩司, 塚本多矩, 市川千種, 高原玲華, 林田寛司, 京野完, 佐久井徳広, 山本五秋, 齋藤香織, 五十嵐良明, 水道水中のイミノクタジン・ジクワット・パラコート LC/MS/MS 一斉分析法の妥当性評価, 環境科学会誌, 29(1), 3-16 (2016)
6. 久保田領志, 小林憲弘, 五十嵐良明, 固相抽出-液体クロマトグラフィー-質量分析計によるハロアセトアミド類の分析法の開発及び水道水中の存在実態, 環境科学会誌, 28(2), 143-152 (2015)

7. 小林憲弘, 久保田領志, 佐々木俊哉, 五十嵐良明, 水道水中のイミノクタジン・ジクワット・パラコートの LC/MS/MS 一斉分析法の開発, 環境科学会誌, 28(2), 117-125 (2015)
8. 小林憲弘, 久保田領志, 田原麻衣子, 杉本直樹, 塚本多矩, 五十嵐良明, 水道水中の農薬類の LC/MS/MS 一斉分析法の開発, 環境科学会誌, 27(1), 3-19 (2014)
9. 小林憲弘, 久保田領志, 田原麻衣子, 清水久美子, 杉本直樹, 西村哲治, 水道水質管理目標設定項目の候補とされている農薬の GC/MS 一斉分析法の開発, 環境科学会誌, 25(5), 378-390 (2012)
10. 小林憲弘, 土屋裕子, 石井一行, 馬場紀幸, 林田寛司, パージ・トラップ・ガスクロマトグラフィー質量分析による水道水中の揮発性有機化合物の分析精度に影響を与える要因の解析, 環境化学, 34, 1-8 (2024)
11. 小林憲弘, 土屋裕子, 木下輝昭, 高木総吉, 中嶋京介, 広木孝行, 平林達也, 藤井裕美, 栗原正憲, 関川慎也, 奥村学, 古口健太郎, 樋口雄一, 大瀧翔吾, 代龍之介, 古川浩司, 松巾宗平, 松澤悠, 高原玲華, 五十嵐良明, 液体クロマトグラフ質量分析計による水道水中のメチルダチオンオキシソンの分析法の検討と妥当性評価, 水道協会雑誌, 92(7), 5-17 (2023)
12. 小林憲弘, 土屋裕子, 高木総吉, 吉田仁, 大窪かおり, 北原健一, 坂本晃子, 木下輝昭, 仲野富美, 橋本博之, 古川浩司, 粕谷智浩, 岩間紀知, 平林達也, 小嶋隼, 林幸範, 古口健太郎, 五十嵐良明, 水道水中農薬の GC/MS スクリーニング分析におけるクロマトグラム解析の誤差要因の分析, 環境化学, 33, 26-40 (2023)
13. Kobayashi N., Takagi S., Kinoshita T., Sakata O., Nakano F., Watanabe N., Nomura A., Kawai N., Hiraiwa T., Okumura M., Furukawa K., Kasuya T., Iwama N., Yonekubo J., Takahara R., Tanaka S., Tsuchiya Y., Ikarashi Y., Development and validation of an analytical method for simultaneous determination of perfluoroalkyl acids in drinking water by liquid chromatography/tandem mass spectrometry. *Journal of Water and Environment Technology*, 20(6), 219-237 (2022)
14. Horibata K., Takasawa H., Hojo M., Taquahashi Y., Shigano M., Yokota S., Kobayashi N., Sugiyama K., Honma M., Hamada S., In vivo genotoxicity assessment of a multiwalled carbon nanotube in a mouse ex vivo culture. *Genes and Environment*, 44(1), 24 (2022)
15. Hojo M., Maeno A., Sakamoto Y., Ohnuki A., Tada Y., Yamamoto Y., Ikushima K., Inaba R., Suzuki J., Taquahashi Y., Yokota S., Kobayashi N., Ohnishi M., Goto Y., Numano T., Tsuda H., Alexander D.B., Kanno J., Hirose A., Inomata A., Nakae D., Two-year intermittent exposure of a multiwalled carbon nanotube by intratracheal instillation induces lung tumors and pleural mesotheliomas in F344 rats. *Particle and Fibre Toxicology*, 19, 38 (2022)
16. 小林憲弘, 高木総吉, 木下輝昭, 仲野富美, 古川浩司, 粕谷智浩, 松巾宗平, 寺中郁夫, 山本剛, 米久保淳, 田中誠也, 丹羽宏之, 会田祐司, 高原玲華, 齊藤香織, 五十嵐良明, 液体クロマトグラフィー質量分析による水道水中の陰イオン一斉分析法の検討と妥当性評価. 水環境学会誌, 45(2), 51-66 (2022)
17. 小林憲弘, 土屋裕子, 五十嵐良明: イプロジオンの水中での分解性と検査法の検討. 水道協会雑誌, 90(11), 11-22 (2021)
18. Abe Y., Kobayashi N., Yamaguchi M., Mutsuga M., Ozaki A., Kishi E., Sato K., Determination of formaldehyde and acetaldehyde levels in poly (ethylene terephthalate) (PET) bottled mineral water using a simple and rapid analytical method. *Food Chemistry*, 344, 128708 (2021)

など多数

【書籍】

1. 馬場健史, 松本雅記, 松田史生, 山本敦史, 決定版 質量分析活用スタンダード～代謝物からタンパク質, 食品・環境の分析まで質量分析のポテンシャルを活かしきる戦略とプロトコール (担当:実践編 III.検査・材料・無機 2.食品・環境の検査 ターゲット分析における分析方法の妥当性評価), 羊土社 (2023)
2. 上水試験方法 2020 年版, 小林憲弘(担当:I.資料・総説編, III.有機物編), 日本水道協会 (2021)
3. IARC Monographs on the Evaluation of Carcinogenic Risks to Humans, Volume 111 "Some Nanomaterials and Some Fibres" (担当:"4.Mechanistic and other relevant data"の一部)IARC 2017 年 5 月 (ISBN:9789283201496)
4. 高橋道人, 福島昭治, 伊東毒性病理学 (担当:5.10 ナノマテリアル), 丸善出版 (2013)
5. World Health Organization, WHO 飲料水水質ガイドライン, 国立保健医療科学院(共訳, 担当:第 12 章 12.1), 国立保健医療科学院 (2012)

6. 小林憲弘, 内藤航, 中西準子, 鉛 [詳細リスク評価書シリーズ 9], NEDO 技術開発機構, 産業技術総合研究所化学物質リスク管理研究センター, 丸善 (2006)

学術賞

受賞者氏名：村上 一真 (むらかみ かずま)

表彰課題：環境配慮行動の促進方策と意思決定プロセスに関する研究

所属・職：滋賀県立大学・教授

専門分野：行動経済学, 環境経済学, 開発経済学

略歴：

1998年3月 広島大学 経済学部 卒業

2000年3月 広島大学 大学院国際協力研究科博士課程前期修了

2000年4月 三菱UFJリサーチ&コンサルティング 研究員

2007年3月 広島大学 大学院国際協力研究科博士課程後期修了

2011年4月 アジア太平洋研究所 研究員

2013年4月 滋賀県立大学 環境科学部 環境政策・計画学科 准教授

2022年4月 滋賀県立大学 環境科学部 環境政策・計画学科 教授 (現在に至る)



村上 一真
(むらかみ かずま)

表彰理由：

村上一真氏は、環境政策の効果発現、環境配慮行動の促進方策、個人の環境配慮行動の意思決定プロセスなどの観点から、グリーンでレジリエントなサプライチェーン、省エネ・省資源行動、節電、緑のカーテン、森林環境税、森林ボランティア活動などの幅広い対象の研究を精力的に行ってきた。他者への参照やヒューリスティックによる意思決定プロセスなど、より複雑かつ現実的な要素を組み込んだそれらの研究成果は、環境科学会誌を含む多数の論文として報告されている。環境経済学・環境経営学・環境政策学の分野への学術的発展に大いに資するものである。環境科学会では、論文賞を1回、優秀研究企画賞を1回受賞するなど、環境科学会における功績も大きい。また、著書を継続的に出版し、研究成果の社会還元・社会実装を意識している点も評価できる。このような村上一真氏の研究業績と活動は、環境科学分野において特に優れた研究業績を挙げた者に与えられる環境科学会学術賞にふさわしいものと評価できる。

主要業績：

【論文】

1. 村上一真, 街なかの市民共同発電が住民の節電行動等に与える影響の分析：滋賀県湖南市と守山市を対象として, 環境科学会誌, 34 (3), 139-151 (2021)
2. 村上一真, 街なかの緑のカーテンが住民の節電行動と温暖化防止に取組む自治体への信頼に与える影響の分析, 環境科学会誌, 33(1), 1-13 (2020)
3. 村上一真, 平山 奈央子, 自然環境の価値認識と保全活動意欲に関する構造分析：早崎内湖を事例として, 環境科学会誌, 31(3), 123-135 (2018)
4. 村上一真, 2011年夏季の専業主婦の節電行動の規定要因の分析：個人費用便益認知と社会費用便益認知の比較を中心に, 環境科学会誌, 28(1), 16-26 (2015)
5. 村上一真, 節電目標の理解度と停電への不安・恐怖が節電行動・節電率に与える影響の分析, 環境科学会誌, 26(5), 401-412 (2013)
6. 村上一真, 住民の森林環境税制度受容に係る意思決定プロセスの分析：手続き的公正の機能について, 環境科学会誌, 26(2), 118-127 (2013)
7. Murakami, K., Kinbara, T., The relationship between shareholder value and international transfer of environmental management practices, International Review of Business 19, 57-69 (2021)
8. 藤本穂乃佳, 白木裕斗, 村上一真, 住宅に対する住民評価の要因分析：省エネ性の影響, 土木学会論文集 G(環境), 77(5), I_331-I_339 (2021)
9. 白木裕斗, 佐藤真, 村上一真, 企業における電気自動車の導入実態と導入意思の要因分析, 土木学会論文集 G(環境), 76(5), I_187-I_95 (2020)

10. 村上一真, 緑のカーテン実施に係る規定要因の分析：近隣住民との関わりに着目して, 環境システム研究論文集, 47, II_49-II_57 (2019)
 11. 村上 真, 緑のカーテン実施の意思決定プロセスの分析：街なかの緑のカーテンの知覚の影響, 土木学会論文集 G(環境), 75(5), I_211-I_222 (2019)
 12. 村上一真, 平山 奈央子, 地域の自然資源の価値の維持のために望まれる保全活動主体の分析：早崎内湖自然再生事業を事例として, 土木学会論文集 G(環境), 75(5), I_223-I_232 (2019)
 13. 村上一真, 平山 奈央子, 地域住民による交流の場としての価値評価と保全活動意欲に関する構造分析, 土木学会論文集 G(環境), 73(5), I_173-I_181 (2017)
 14. 矢守裕貴, 村上一真, 違反駐輪抑止に対するポジティブメッセージ「感謝」の効果検証：大学構内での社会実験に基づく実証, 土木学会論文集 G(環境), 72(5), I_85-I_91 (2016)
 15. 小松郁也, 村上一真, 住民の河川保全活動への参加と継続の要因に関する構造分析：アダプト・プログラムに着目して, 土木学会論文集 G(環境), 71(5), I_347-I_355 (2015)
 16. 寺村友里, 村上一真, 大学生の環境配慮行動の規定要因の分析：大学内の環境への取り組みに着目して, 土木学会論文集 G(環境), 71(5), I_337-I_345 (2015)
 17. Kimbara, T., Murakami, K., Tapachai, N., Environmental management transfer and environmental performance by Japanese firms in Thailand, Applied Environmental Research 36(4), 81-90 (2014)
 18. 村上一真, 森林環境税導入地域を対象とした森林行政への信頼の規定要因に関する分析, 心理学研究, 83(5), 463-471 (2012)
 19. 村上一真, 森林環境税の必要性判断に係る意思決定プロセスの分析：地域への愛着と地域との関わりに係る分析, 環境経済・政策研究, 5(1), 34-45 (2012)
 20. 村上一真, 集団での環境配慮行動の協力意向に係る規定要因の構造分析, 土木学会論文集 G(環境), 67(5), I_177-I_186 (2011)
 21. Murakami, K. Matsuoka, S., An empirical study of the methodology for assessing social capacity: The case of urban air quality management, Japanese Journal of Evaluation studies 9(2), 1-16 (2009)
 22. Murakami, K. Matsuoka, S., Evaluation of social capacity for urban air quality management, Japanese Journal of Evaluation Studies 8(2), 65-81(2008)
- など多数

【書籍】

1. 村上一真, 環境政策の効果と環境配慮行動の分析：地域の自然環境の保全と創出の行動経済学, 日本評論社 (2021)
2. 金原達夫, 村上一真, 環境経営のグローバル展開：海外事業およびサプライチェーンへの移転・普及のメカニズム, 白桃書房 (2016)
3. 村上一真, 環境配慮行動の意思決定プロセスの分析：節電・ボランティア・環境税評価の行動経済学, 中央経済社 (2013)
4. 村上一真, 環境と開発の政治経済学：持続可能な発展と社会的能力, 多賀出版 (2007)

奨励賞

受賞者氏名：青木 えり（あおき えり）

表彰課題：人々の環境配慮行動とその心理構造の解析に関する研究

所属・職：総合地球環境学研究所・上級研究員

専門分野：環境システム

略歴：

- 2012年 日本学術振興会, 特別研究員 (DC2)
- 2014年 東京大学, 大学院工学系研究科, 都市工学専攻 修了
- 2014年 東京大学, 国際高等研究所 サステイナビリティ学連携研究機構, 特任研究員
- 2016年 慶應義塾大学, 大学院 政策・メディア研究科, 特任助教
- 2018年 東洋大学, 情報連携学部, 助教
- 2023年 総合地球環境学研究所, 上級研究員 (現在に至る)



青木 えり
(あおき えり)

表彰理由：

青木えり氏は、人々の環境配慮行動に関する特徴を明らかにするとともに、心理モデルの構造化解析に関する多数の論文を発表し、脱炭素社会の実現に向けて貢献している。コロナ禍におけるテレワークによる二酸化炭素排出量低減効果の解析やその利用状況の特性評価など、時宜にかなった課題にも取り組んでいる。環境科学会誌をはじめとした多数の学術雑誌に論文が掲載され、高い評価を得ている。このように、環境科学の分野での社会的・学術的発展に大きく貢献している。

主要業績：

【業績課題に係わる主要論文】

1. 青木えり, 平松あい, 花木啓祐, コロナ禍におけるテレワークの期間限定利用者と継続利用者の特徴分析-東京 23 区と栃木県での勤務者を対象とした調査-, 環境科学会誌, 36(4), 122-134 (2023)
2. 森島隆宏, 栗栖聖, 中谷隼, 青木えり, 森口祐一, 食料支援団体の現状および市民農園との連携受容性, 環境科学会誌, 34(6), 281-288 (2021)

【論文】

1. Aoki E., Shirai N., Baba K., Masuhara N., Taniguchi M., Developing behavioral models of citizens for adapting to and mitigating climate change: A study on four prefectures in Japan, *Frontiers in Climate*, 6, (2024)
2. 青木えり, 平松あい, 花木啓祐, コロナ禍のテレワークによる CO2 排出量低減効果の推定, 土木学会論文集 G (環境), 79(26) 17-29 (2023)
3. 白井 信雄, 田中 充, 青木 えり, 気候変動への緩和・適応行動の意識構造の分析:-地域における気候変動学習のために-, 環境教育, 25(2), 2_62-71 (2015)
4. 青木えり, 栗栖聖, 花木啓祐, 様々な環境配慮行動に対応する心理モデルの探索的な構築, 土木学会論文集 G (環境), 69(6), II_93-II_104 (2013)
5. 青木えり, 栗栖聖, 花木啓祐, 各地方自治体における市民の環境配慮行動を規定する要因分析, 環境システム研究論文集, 40(6), II.165-II.176-II_176 (2012)
6. 青木えり, 栗栖聖, 中谷隼, 花木啓祐, 家庭における環境配慮行動の類型化とその特徴分析, 環境工学研究論文集, 48, III.615-III.625 (2011)
7. 青木えり, 栗栖聖, 中谷隼, 花木啓祐, 市民の環境配慮行動に対する全国 47 都道府県の現状分析と地域間比較, 環境システム研究論文集, 38, 17-26 (2010)

【書籍】

1. Matsuda H., Sekiyama M., Tsuchiya K., Chen C., Aoki E., Rimbawan R., Nguyen T.T., Framing in sustainability science : theoretical and practical approaches, Springer, 2020.

論文賞

受章者氏名：徳村雅弘*，王齐*，石橋龍太郎**，安保貴永**，皆川正和**，三宅祐一*，雨谷敬史*，牧野正和*

対象論文：炭素材料併用型フォトフェントン反応による汚染物質除去機構の反応速度論的解析，2022 年 35 巻 2 号 p. 103-112

受賞論文における所属：* 静岡県立大学 ** 三菱ケミカル株式会社

表彰理由：

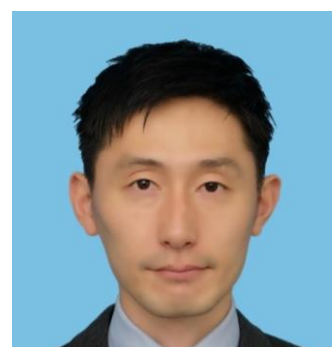
本論文は、アゾ染料であるオレンジ II を用い、反応速度論的な解析に基づいて、炭素材料併用型フォトフェントン反応の促進機序の解明を行ったものである。炭素材料への吸着およびフォトフェントン反応による分解について、緻密で重厚な調査にもとづいて丁寧に記述してある。フォトフェントン反応との併用により適した炭素材料の開発の可能性を示していることから、将来的な展開が期待できる内容となっている。より効率的な炭素材料の提案は、環境科学的な意義の高いものと評価できる。以上により、本論文は、本会の論文賞に値すると考えられる。



徳村 雅弘
(とくむら まさひろ)



王 齐
(Qi WANG)



石橋 龍太郎
(いしばし りゅうたろう)



安保 貴永
(あんぼ たかのり)



皆川 正和
(みながわ まさかず)



三宅 祐一
(みやけ ゆういち)



雨谷 敬史
(あまがい たかし)



牧野 正和
(まきの まさかず)

受章者氏名：北本靖子*，伊藤理彩*，東海明宏*

対象論文：水道水源における化学物質流出事故に対する高度浄水処理及び対策オプションの評価，2022 年
35 巻 3 号 p. 121-136

受賞論文における所属：* 大阪大学

表彰理由：

本研究は，過去に発生した水源水質事故事例にもとづいて，浄水場におけるオゾン処理及び粒状活性炭処理といった高度浄水処理による低減が十分であるかを検討するとともに，対応オプションについて評価したものである。全体的に丁寧な解析と考察に支えられており，論文としての完成度が高い。化学物質の流出事故という時宜にかなった重要なテーマを扱った中で，費用対効果分析による具体的提言を導出している点に環境科学としての有用性がある。以上により，本論文は，本会の論文賞に値すると考えられる。



北本 靖子
(きたもと やすこ)



伊藤 理彩
(いとう りさ)



東海 明宏
(とうかい あきひろ)